

Title	『讃岐典侍日記』下巻の成立背景 : 堀河天皇の追慕 と天皇の代替わり
Author(s)	丹下, 暖子
Citation	語文. 2010, 94, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69149
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに

『讃岐典侍日記』下巻の成立背景

堀河天皇の追慕と天皇の代替わり―

丹

下

暖

子

とを指摘した。ただし、これらは鳥羽天皇に関する記述を中心と 代替わり」という過渡期を記録しようとする姿勢が認められるこ 記録」としての性格をも有するものであること、そこに「天皇の 追慕してゆく。稿者はかつて、この下巻が「鳥羽天皇の代始めの られるところから始まり、再出仕の日々の中で堀河天皇を回想、 ら鳥羽へと、天皇が代替わりする時を捉えた日記でもある。 「追慕の記」である下巻は、讃岐典侍が鳥羽天皇への出仕を求め 堀河天皇の崩御を悼み、追慕する『讃岐典侍日記』は、堀河か 物に いる。藤原忠実と源国信、雅俊である。この三人は、讃岐典侍が

上げたが、堀河天皇の追慕を問題とする時、看過できない人物が 下巻において注目すべき存在として、旧稿では鳥羽天皇を取り 雅俊への関心

特に共感を示す存在として登場する。

への出仕が本格的に始まった嘉承三年(一一〇八)正月の記事の 一節である。讃岐典侍が天皇に食事を差し上げているところに参 まず、忠実について見てみよう。以下に挙げるのは、鳥羽天皇

内した忠実は、次のように声をかける。 る、いとかなし。 たまひて恋しきに、そのかみの物語してなぐさめん」などあ まふぞ。今よりはかやうにてこそは。そも昔の思ひ出でられ 御障子のうちに近やかについゐて、「いつよりさぶらはせた われも人も、おなじやうにてこそものせさ

せたまふめれ。

手がかりとしつつ、下巻の成立背景を探ってみたいと思う。 的な記述に注目することから始める。そして、天皇の代替わりを した検討に基づくものであり、旧稿では取り上げなかったことも

本稿は、「追慕の記」としての下巻に見られるいくつかの特徴

(嘉承三年正月三日 四四二頁)

も「おなじ」状況にあることが記される。われると述べる。それを受けて、傍線部のように讃岐典侍も忠実忠実は、点線部のように、堀河天皇の「昔」が思い出され、慕

さらに忠実の言葉は続く。

も隠れさせたまひしかな。世はかくもありけるかな」といひをり、かやうならんことどもとこそ思はざりしか。げに陰にたりしかば、御膝高くなさせたまひて、陰に隠させたまひしなど申ししこととは、思はざりしかな。例ならでおはしまい「思ひかけざりしことかな。かやうに近やかに参りて、もの「思ひかけざりしことかな。かやうに近やかに参りて、もの

な」と感慨を漏らす。これを聞いた讃岐典侍は、傍線部のようにすっかり変わってしまった今の様子に、「世はかくもありけるかすため、天皇が膝を高く立てたという思い出とともに、忠実は、病に臥した堀河天皇に添い臥しする讃岐典侍を忠実の目から隠病に臥した堀河天皇に添い臥しする讃岐典侍を忠実の目から隠

かけて立たせたまひぬる聞くぞ、げにと心憂き。

忠実に同意し、「心憂き」とその心情を記す。

いる。

だけが特に描かれているのである。 した中で、堀河天皇の在りし日を回想し、追慕の思いを抱く忠実て「人々」、「人たち」と表現され、ひとまとめに扱われる。そうは具体的な人物がほとんど登場せず、鳥羽天皇と忠実以外はすべり、共感される存在として登場する。そもそも、初出仕の記事にら、共感される存在として登場する。そもそも、初出仕の記事にらいない。

に、源国信、雅俊に注目しよう。以下は、灌仏の日の記事の

灌仏の日になりぬれば、われもわれもと取り出だされ

たり。

一節である。

ほかた例は外のかたも見じと思ひて、「下略」にかた例は外のかたも見じと思ひて、「下略」で、いと堪へがたげにもの思ひ出でたるけしきなり。顔もたて、いと堪へがたげにもの思ひ出でたるけしきなり。顔もたで、いと堪へがたけにもの思ひ出でたるけしきなり。顔もたで、いと堪へがたげにもの思ひ出でたるけしきなり。顔もたいようでは、次第によりて、つぎつぎの上達部、かく。何ごとまへれば、次第によりて、関、参らせたまひてかけさせた

河天皇のことを追慕する二人に讃岐典侍が共感を抱く形となって部のように涙が抑えがたくなったと続く。忠実の場面と同様、堀昔を思い出し、悲しみを新たにする二人を見て、讃岐典侍も傍線うに、堀河天皇の時と変わらず、行事が営まれてゆく中、点線部のよ堀河天皇の時と変わらず、行事が営まれてゆく中、点線部のより、

の思いが一致しないことを描いた場面である。んど見られない。下巻で中心となるのは、周囲の人々と讃岐典侍を述べる場面は、上巻には頻出するものの、実は、下巻にはほと上げた。このように讃岐典侍が周囲の人々と同じ思いであること上げた。このように讃岐典侍が周囲の人々と同じ思いであること以上、堀河天皇を慕う三人に讃岐典侍が共感を示す場面を取り

一例として、四月の衣がえの折のことを記した記事を挙げてみ

本と、身のならんやうも知らず几帳ども取りあへる、人見ある。「見る」という行為を軸として、人々と讃岐典侍が相反をする。「見る」という行為を軸として、人々と讃岐典侍は堀河天女官たちが几帳を取り合う様子につけても、讃岐典侍は堀河天女官たちが几帳を取り合う様子につけても、讃岐典侍は堀河天女官たちが几帳を取り合う様子につけても、讃岐典侍は堀河天女官とある。「見る」という行為を軸として、人々と讃岐典侍が相反とする関係にある。

典侍が特に関心を寄せた三人に注意しておきたい。の記」としての下巻の有りようとも深く関わる存在として、讃岐記述は、特徴あるものとして注目されるだろう。本節では「追慕場面は少ない。そうした中に見られる忠実や国信、雅俊をめぐる下巻は、上巻と異なり、讃岐典侍が周囲の人々に共感を覚える

三 追慕の有りよう

岐典侍は堀河院に向かう。 は、嘉承二年(一一○七)十一月の月忌みの記事を見てみし、三人をめぐる記述とは趣を異にし、注意される。ただ月忌みは、かつて天皇に仕えた人々が集う追悼の場である。ただ月忌みは、かつて天皇に仕えた人々が集う追悼の場である。ただ月忌みは、かつて天皇に仕えた人々が集う追悼の場である。ただ月記のは、嘉承二年(一○七)十一月の月忌みの記事を見てみし、三人の場所では忠実と国信、雅俊に注目したが、堀河天皇を追慕する

ぬ御こころざしかな。今日は」と、あはれがりあひたり。がしくおはしつらん』と申しあひたりけるに、おぼろけなら『今日は、え参らせたまはぬなめり。ことわりぞかし。いそ参りたれば、人々、「あな、いみじ。例よりも日たけつれば、

(嘉承二年十一月十九日 四三六頁)

堀河天皇の崩御後も堀河院にとどまっている女房達の発言であれてもいる。 地で、いつもより到着が遅れた讃岐典侍に対し、鳥羽る。傍線部には、いつもより到着が遅れた讃岐典侍に対し、鳥羽な」と続くことで、忙しくとも駆けつける讃岐典侍を賞賛するがな」と続くことで、忙しいから来られないのだろうと話して下皇への出仕が決まり、忙しいから来られないのだろうと話して大皇への出仕が決まり、忙しいから来られないのだろうと話している女房達から特別視され、一線を画す存在として位置づけらいた。とある。 である。 がな」と続くことで、忙しくとも駆けつける讃岐典侍に対し、鳥羽る。傍線部には、いつもより到着が遅れた讃岐典侍に対し、鳥羽る。 がな」と続くことで、忙しいから来られないのだろうと話して でするが遅れた讃岐典侍に対し、鳥羽

ゆる。 (嘉承三年正月十九日 四四三~四四四頁)ゆる。 (嘉承三年正月十九日 四四三~四四四頁)がに参りたれば、人々、「いかで参りたまへるぞ。内にと聞きまゐらせつるは。この月はよもと思ひまゐらせしに」といんと思へば。いみじういそがしかりしだにも参りした」といんと思へば。いみじういそがしかりしだにも参りて、場正月になりぬれば、この月ならんからに欠かじと参りて、堀正月になりぬれば、この月ならんからに欠かじと参りて、堀下月になりぬれば、この月ならんからに欠かじと参りて、堀下月になりぬれば、この月ならんからに欠かじと参りて、堀下月になりぬれば、正月の初出仕後である。

仕する立場にあることである。 が、やはり女房達がまず意識するのは、讃岐典侍が鳥羽天皇に出 どんな時でも欠かさず訪れる讃岐典侍を賞賛する話へと展開する 岐典侍に対し、女房達は、傍線部のように、再出仕した今は来ら れないものと思っていた、と述べる。ここでも、点線部のように 鳥羽天皇への出仕が本格的に始まってからも月忌みに訪れた譖

だろう。 るものの、今は同じ立場にないことを明示する記述と捉えられる 言及は、讃岐典侍と女房達が、ともに堀河天皇を追慕する身であ 羽天皇に出仕する立場にあることに言及する。こうした女房達の 主眼があるのだが、堀河院にとどまる女房達は必ず讃岐典侍が鳥 る。いずれの場面も、讃岐典侍の追慕の思いの深さを語ることに さず月忌みに訪れる讃岐典侍を女房達が賞賛するという構造をと 以上の二つの場面は、鳥羽天皇に出仕することになっても欠か

用が中心となる。 御を悼む秦兼方の歌と、一条天皇の崩御を悼む上東門院の歌の引 さて、三月の場合、月忌みそのものについては、後三条院の崩

とおもしろし。兼方、後三条院におくれまゐらせて、 三月になりぬれば、例の、 りけれ いにしへに色も変はらず咲きにけり花こそものは思はざ 月に参りたれば、 堀河院の花、 įλ

とよみけん、 しきなり。 げにとおぼえて、花はまことに色も変はらぬけ

> うせさせたまへりけん院のうちの、ひきかへかいすみさびし 例時たえず、二十人の蔵人町、左近の陣など、僧坊になりた 昔の清涼殿をば御堂になさせたまひて、七月までは、 り。内裏にてありしところども、さびしげなる、見るにも、

いひけん 影だにもとまらざりける雲のうへを玉のうてなとたれか げなるを、御覧じて、

とよませたまひけん、げにとぞおぼゆる。

(嘉承三年三月十九日 四四五~四四六頁)

い る⁽⁹⁾ ており、この二首に自身の堀河天皇追慕の思いを託す形となって とぞおぼゆる」と、同様の表現が続く。讃岐典侍の共感が示され 兼方、上東門院の歌には、それぞれ「げにとおぼえて」、「げに

り、ここには堀河院にとどまる女房も登場する。 三月は、月忌みに続けて行われた三十講についても記されてお 思ひ出でもなげに見ゆるところを、忘れず見ゆる」とおほせ し近く参らせたまへ。典侍殿は今ははづかし」といふを聞か ふに具して参りて、講などはてて、御前近く三位殿を召せば 宮の御かたに、三十講をおこなはせたまふとて、 られもはてず、むせかへらせたまへる音の聞こゆるに、われ せたまひて、「それしもこそこころざし見ゆれ。見だてなく さぶらはる。宰相とてさぶらはるる人、「三位殿はいますこ に一品づつ講ぜさせたまふ。それ聞きに三位殿の参らせたま 法華経を日

も堪へがたし。 暮れぬればまかでぬ。

(嘉承三年三月 四四六~四四七頁)

うに促す一方で、讃岐典侍に対しては「今ははづかし」とする。 とてさぶらはるる人」が、傍線部のように、三位殿には近づくよ けた場面である。中宮のもとに参上しようとしたところ、「宰相 鳥羽天皇に出仕する今は気が引ける、というのである。 堀河天皇の中宮篤子が催す三十講に、姉の三位殿とともに出か

天皇に出仕する讃岐典侍と堀河院にとどまる女房との隔たりが描 の月忌みと同様の場面と見なせるだろう。ここでもやはり、鳥羽 が再出仕する身であることを意識したものであり、十一月、正月 ている。しかし、「宰相とてさぶらはるる人」の発言は讃岐典侍 る中宮の発言にあり、追慕の思いの深さが再確認される形となっ もちろん、この場面の主眼は、点線部の讃岐典侍の誠意を認め

かれているのである。

ろう。 する讃岐典侍と堀河院にとどまる女房達の立場の違いと言えるだ みに訪れる讃岐典侍を賞賛するという形である。三つの場面で特 鳥羽天皇に出仕する立場にあることを意識し、またそれ故に月忌 に記されたのは、讃岐典侍の追慕の思いの深さとともに、再出仕 した構造をとっている。堀河院にとどまる女房達は、讃岐典侍が 以上、月忌みの場面を中心に取り上げてきたが、いずれも類似

関わってのものではないだろうか。堀河天皇追慕の思いは両者に こうした立場の違いに対する言及は、両者の追慕の有りようと

る。

共通するものであったはずだが、その有りようは一様ではなかっ

たと考えられるのである。

節が、追慕の有りようを問題とするにあたり、示唆的である。 次に挙げる天仁元年(一一〇八)八月の内裏遷幸にまつわる一 御覧ぜましかば、いかにめでさせたまはましと思ふに 夕べの風なびくけしき、ことに見ゆ。これを見るにつけても、 なかにも、萩の色こき、咲きみだれて、朝の露玉をつらぬき、 御溝水の流れに並み立てるいろいろの花ども、いとめでたき 萩の戸におもがはりせぬ花見ても昔をしのぶ袖ぞつゆけ

思ひつづけたまはんとおしはかりて、これを奉りしかば、 殿を見やるにつけても、思ひ出でらるれば、里につくづくと はせて、ことのはじめに漏り聞こえん、よしなければ、承香 と思ひゐたるを、人にいはんも、おなじ心なる人もなきにあ

「思ひやれ心ぞまどふもろともに見し萩の戸の花を聞く

讃岐典侍は、「萩の戸に」の歌を詠み、自身と同じように堀河天 内裏遷幸の翌朝、讃岐典侍は鳥羽天皇に請われて内裏を案内す かつての日々を思い起こさせる情景に追慕の思いを深くした ひ出でらるる。(天仁元年八月二十二日 四五九~四六○頁) おしはかられて」ぞある。かくてあるしもぞ、いますこし思 なり、まして、つくづくとまぎるるかたなく思ひつづけんは、 思へば、さておなじさまにてし歩かせたまふだに、さおぼす

だ、とする。 傍線部のように、再出仕する自身の方がより昔が思い出されるの傍線部のように、再出仕する自身の方が気持ちが紛れる折もなく、昔は点線部のように、里居の身の方が気持ちが紛れる折もなく、昔皇のことを追慕する人を求めて里居の知人に送る。しかし、返事

いは、讃岐典侍と女房達それぞれの追慕の有りようを反映したもはまることだろう。月忌みの場面で繰り返し言及される立場の違に対し、再出仕する讃岐典侍は今が契機となって昔を思い出すのようが端的に表れている。里居の知人は昔を「思ひつづけ」るのようが端的に表れている。里居の知人は昔を「思ひつづけ」るのここには、里居と再出仕という、二つの立場による追慕の有り

のなのである。

う視点を有する側に属していたことは明らかである。あった。讃岐典侍が堀河天皇を追慕するにあたって、「今」といては、讃岐典侍が特に関心を寄せる三人を取り上げたが、この三再出仕する「今」を契機とするものであったと考えられる。前節身の追慕の思いではなく、その有りようと言えるだろう。讃岐典侍自追慕の思いではなく、その有りようと言えるだろう。讃岐典侍自ら視点を有する側に属していたことは明らかである。

達や里居の知人には持ち得ない、再出仕する讃岐典侍の特質で、そして、この「今」という視点こそが、堀河院にとどまる女房

部のように、堀河天皇に出仕した昔は食事中であっても席を立つ皇に食事を差し上げているところに忠実が参内した際、まず傍線

右は、二節でも取り上げた正月の初出仕の一節である。鳥羽天

この「今」に注目して、下巻を考えてみたい。点に特徴があるが、あらためてその重要性が窺われる。次節では、あった思われる。そもそも、下巻は「今」を軸として構成される

Ⅰ 「今」への視点と堀河天皇の追慕

河天皇の回想記事である。 河天皇の回想記事である。 では、この「今」に注目して、「追慕の記」としての下巻を捉節では、この「今」に注目して、「追慕の記」としての下巻を捉のは、鳥羽天皇に出仕する「今」という視点の重要性である。本的と思われる記述をいくつか確認してきた。そこから見えてきた的と思われる記述をいくつか確認してきた。そこから見えてきた

半に見られる例を挙げる。 回想記事の様相は、下巻前半と後半で大きく異なる。まずは前

ざらん。 (嘉承三年正月三日 四四一~四四二頁) けることを心にまかせて過ぐしけん年月を、いかで思ひ知らはれんずると思へば、なほゐたるも、かくこそありがたかりはることを心にまかせて過ぐしけん年月を、いかで思ひ知らけることを心にまかせて過ぐしけん年月を、いかで思ひ知らはれんずると思へば、なほゐたるも、かくこそありがたかりはることを心にまかせて過ぐしけん年月を、いかで思ひ知らば、も昼つけて、殿参らせたまひて、人々ゐなほりなどすれば、も昼つけて、殿参らせたまひて、人々ゐなほりなどすれば、も

か見られる。 出仕する「今」と対比する形で堀河天皇を回想する場面がいくつ出仕する「今」と対比する形で堀河天皇を回想する場面がいくつできない「今」に言及する。下巻前半には、こうした鳥羽天皇にことができたと回想し、続けて、点線部のように席を立つことが

たに見出すという構造である。て、かつての堀河天皇に出仕した日々を捉え直し、その意味を新によってあらためて得られる感慨だろう。「今」との対比によっ堀河天皇のありがたさである。これは、鳥羽天皇に出仕すること城比を通して讃岐典侍が認識するのは、波線部にあるように、対比を通して讃岐典侍が認識するのは、波線部にあるように、

る分量も多くなる。皇の親密さを語るものである。下巻前半と比べ、回想に費やされ皇の親密さを語るものである。下巻前半と比べ、回想に費やされた、下巻後半で中心となる回想記事は、讃岐典侍と堀河天

で過ごした雪の朝のことを回想する場面を見てみよう。 一例として、五節の営みを鳥羽天皇と見る中、堀河天皇と二人

雪の降りたるつとめて、まだ大殿ごもりたりしに、雪高く降

いつも雪をめでたしと思ふなかに、ことにめでたかりしかば、ひしかば、もろともに具しまゐらせて、見しつとめてぞかし、りたるよし申すを聞こしめして、その夜御かたはらにさぶら

〔中略〕女の声にて、透垣のもと近くさし出でて見るけはひ

れ。雪のめでたさ、御目さめぬる心地する」とて、笑はせたれ、聞け。いみじき大事出で来にたりとこそ思ひあつかひたえ取り行くまじきはとよ」といひしを聞かせたまひて、「こして、「あな、ゆゆしの雪の高さや。いかがせんずる。裾もして、「あな、ゆゆしの雪の高さや。いかがせんずる。裾も

さによろづさめぬる心地す。
れ、いへ、それ、いへ」と引き向けさせたまへば、うつくしれ、いへ、それ、いへ」と引き向けさせたまへば、うつくしれ、いへ、それ、いへ」と引き向けさせたまへば、うつくしまびむすぼほるる

に立ち戻る。 に立ち戻る。 に立ち戻る。 に立ち戻る。 に立ち戻る。 にはない。 では、起き出した姿のまま、ともに雪を眺めた甘美な とい出なども語られ、かなりの分量が回想に費やされる。 でれで 中略部分では、起き出した姿のまま、ともに雪を眺めた甘美な

はり次のように「今」に言及する。 扇引きの話が記事の大部分を占めるが、その締めくくりでは、や頁)と、冒頭からすぐに回想が始まる。一年前の堀川の泉見物とこのころは、こともなく御心地よげに遊ばせたまひて」(四五〇の記事などは、「六月になりぬ。暑さ所せきにも、まづ、去年のの記事などは、他の回想記事にも共通する。たとえば、嘉承三年六月

(嘉承三年六月(四五一頁)らせけるにかとなめげに、今日は、ありがたくおぼゆる。そのをりは何ともおぼえざりしことさへ、いかでさはしまゐ

分からなかった堀河天皇のありがたさに気づくというのである。る、とある。鳥羽天皇に出仕する「今」があるからこそ、当時は当時は何とも思わなかったことが、「今日」ありがたく思われ

きい。回想が中心となる六月の記事においても、「今」のもつ意味は大回想が中心となる六月の記事においても、「今」のもつ意味は大

そもそも、この「今」に対する言及は、『讃岐典侍日記』の冒いう視点を有する讃岐典侍の追慕の特徴と言えるだろう。れ、価値あるものとして発見されるのである。これは、「今」とれ、価値あるものとして発見されるのである。これは、「今」とれ、価値あるものとして発見されるのである。これは、「今」が入り込む。る回想記事を確認してきたが、そこには必ず「今」が入り込む。以上、「追慕の記」としての下巻において、大きな位置を占め以上、「追慕の記」としての下巻において、大きな位置を占め

頭から始まっている。

雲」といひけん人もことわりと見えて、かきくらさるる心地けしき、思ひしり顔にむら雲がちなるを見るにも、「雲居のはれなれば、端を見出だしてみれば、雲のたたずまひ、空のはれなれば、端を見出だしてみれば、雲のただずまひ、空のおと見え、さらぬだにものむつかしきころしも、心のどか五月の空もくもらはしく、田子の裳裾もほしわぶらんもこと

る。も書きつづくれば」(三九二頁)と、執筆動機なども記されていも書きつづくれば」(三九二頁)と、執筆動機なども記されてい出仕した八年間が忘れ難く、「なぐさむやと、思ひ出づることど上下巻を通しての序の冒頭である。続く部分では、堀河天皇に

ぞする。

(序 三九一頁)

仕した八年間を、「今」とは鳥羽天皇に出仕する現在を、それぞ「昔」だけでなく「今」への言及がある。「昔」とは堀河天皇に出こうした日記全体の方向性を示す序の冒頭で、傍線部のように

ともに「思ひつづけられ」る対象となっているのであり、日記にれ指すと解されるだろう。鳥羽天皇に出仕する「今」も「昔」と

おける「今」の重要性は明らかである。

に出仕した讃岐典侍ならではのものと思われる。う。こうした「今」という視点は、堀河と鳥羽という二人の天皇行え直し、その意味を見出そうとするものであったと言えるだろ天皇追慕は、「今」との関わりの中で堀河天皇に出仕した日々を特徴である回想記事と密接に関わるものである。讃岐典侍の堀河する「今」は、構成面のみならず、「追慕の記」としての下巻のする「今」は、構成面のみならず、「追慕の記」としての下巻の以上、堀河天皇の回想記事を中心に見てきた。鳥羽天皇に出仕以上、堀河天皇の回想記事を中心に見てきた。鳥羽天皇に出仕

堀河天皇を位置づけてゆくものなのである。 堀河天皇を位置づけてゆくものなのである。 を「今」に示してゆくのが、『讃岐典侍日記』の下巻と捉えられるだろう。讃岐典侍の堀河天皇への思いは、回想記事に語られるを「今」に示してゆくのが、『讃岐典侍日記』の下巻と捉えられるだろう。讃岐典侍の堀河天皇という存在、たりを見されるのは、堀河天皇という存在をして、「今」を通して見ることにより発見されるのは、堀河

五 おわりに

まざまな人々の哀傷歌が残る。また、『中右記』には、堀河天皇も言及した源国信は『源中納言懐旧百首』を編み、勅撰集にはさ実に多くの人々が、堀河天皇の崩御を悼み、追慕した。本稿で

追慕の夢の話が幾度も記されている。

験し、二人の天皇に出仕することとなった讃岐典侍が持ち得た視語ることであったと言えるだろう。これが、天皇の代替わりを経を編むにあたって讃岐典侍が試みたのは、鳥羽天皇に出仕するず、また和歌も多くはない。夢や和歌の代わりに、「追慕の記」で、また和歌も多くはない。夢や和歌の代わりに、「追慕の記」では、夢の話は登場せ

るものであったと言えるだろう。において、天皇の代替わりは『讃岐典侍日記』の形成に深く関わにおいて、天皇の代替わりは『讃岐典侍日記』の形成に深く関わなければ書かれることのなかったものと思われる。こうした意味 『讃岐典侍日記』の、少なくとも下巻は、鳥羽天皇への出仕が

点であったと思われる。

注

- (小学館、一九九四年)。(1) 石井文夫校注、新編日本古典文学全集『讃岐典侍日記』解説
- 下巻の位置づけ―」(『皇統迭立と文学形成』和泉書院、二〇〇九(2) 拙稿「天皇の代替わりと『讃岐典侍日記』―鳥羽天皇から見る
- 用本文の下に頁数を記す。(4) 『讃岐典侍日記』の引用は、新編日本古典文学全集に拠り、

引

- 、) 「お『『たびは『十二寸』 になって リゴー にほう なお、『中右記』によると、この日、忠実は参内していない。
- 仁元年八月)、五節の頃(天仁元年十一月)の場面などがある。羽天皇への出仕を要請された折(嘉承二年十月)、内裏遷幸(天例として挙げた四月の衣がえ以外にまとまったものとして、鳥

7

- などが挙げられる。 (8) 日記の追記部分及び、本節で取り上げる人物を除くと、一周忌(8)
- 七九年)は、下巻について、堀河天皇に出仕した八年間を直接記れて、「大年間の構造」(『日記文学・作品論の試み』笠間書院、一九名ける時間の構造」(『日記文学・作品論の試み』笠間書院、一九名ける時間のあり方を問題とする石埜敬子「讃岐典侍日記にいを託し、表現する一つの方法として機能していると思われる。いを託し、表現する一つの方法として機能していると思われる。いを託し、表現する一つの方法として機能していると思われる。いを託し、表現する一つの方法として機能していると思われる。いを託し、表現する著名な先行歌を一首そのまま引用(9)なお、勅撰集などに入集する著名な先行歌を一首そのまま引用(9)なお、勅撰集などに入集する著名な先行歌を一首そのまま引用
- り上げた。(1) 前掲注(2)拙稿において、鳥羽天皇の描写に注目する形で取

さず、「再出仕後の現在を契機として連想される範囲で帝を語ろ

うとしている」とする。

堀河帝との愛を失った悲哀が、帝との別離の日が日一日と遠のい六年)も、この序に見られる「今」に注目し、「かけがえのない(『日記文学の本質と方法』風間書房、二〇〇一年、初出は一九八(2) 津本信博 『讃岐典侍日記』の成立―その執筆年次と契機―」

(たんげ・あつこ 本学大学院博士後期課程)